

提出日：令和 3 年 2 月 24 日
所 属： 附属動物病院、小動物臨床研究室
氏 名：伊藤哲郎 職位：助教

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

附属動物病院、小動物臨床研究室に所属し、伴侶動物の内科および腫瘍内科分野の教育・研究活動を行っている。学部学生に対する教育活動は、臨床獣医学教育分野の伴侶動物の内分泌代謝性疾患、リンパ系腫瘍を担当し、講義で疾患の全体像を伝え、臨床実習では実際の臨床例を用いて具体的な診断アプローチ、治療法を経験、習得させている。

授業外では動物病院内科の診療科長として内科診療を統括し、動物病院に所属する研修獣医師に対する卒後内科研修指導を行っている。日本獣医がん学会、獣医腫瘍科認定医 I 種に認定されており、学会の認定医認定委員会に所属して認定医講習会、認定医試験を通じて卒後専門教育を行っている。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
獣医内科学実習	獣医学科	必	5	120
小動物獣医総合臨床	獣医学科	必	5	120
小動物臨床実習	獣医学科	必	5	120
総合獣医学	獣医学科	必	6	120
先端獣医療	獣医学科	選	6	30
小動物病院実習	獣医学科	選	6	30
獣医学特論 I	獣医学科	必	5	3
動物健康管理学	動物応用科学科	選	3	60

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

実際の臨床例に対応する上で重要なことは、問題となっている臨床徴候を適切に把握し、解決のための治療方針を計画できることである。

人間と同様に伴侶動物の寿命も延長し、病院を受診する動物も高齢化している。高齢動物は臨床徴候の原因となっている生体機能・構造の異常以外にも、様々な加齢性変化が含まれた検査結果を示す。様々な臨床徴候について、実際の症例を通じて背景に存在する病態生理学を理解することを積み重ね、問題となる臨床徴候の原因確認、重症度把握のために臨床検査を活用する意識を学生に植え付けてゆきたい。

治療方針に関しても、疾患に対する最善の治療方針を各症例が持つ条件を加味して最適化することを実際の症例での経験を通じて習得させてゆきたい。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方, 方法）

上記の理念を実現するために、学生には自分が対面している症例から得た情報を言語化して、他者と共有するトレーニングを繰り返し行わせる。症例に発生している問題・臨床徴候を適切な獣医学用語に変換するトレーニングは、症候学における用語の真の意味、用語の背景に存在する病態生理学の理解につながる。これを教員、学生同士と共有することを繰り返し、適切に使いこなせる症候学獣医学用語の語彙力を増強する。

臨床検査の選択、結果の解釈についても言語化して、他者と共有するトレーニングを繰り返すことで、検査により得られた数値、画像の変化に対する理論的背景を習得する。

治療方針の最適化についても、自ら立案した方針の言語化および他者とのディスカッションを通じて、治療方針を最適化する上で配慮すべきポイントを習得できると考える。

これらの“症例情報の言語化”が学生に有益に働くための準備として、座学での講義段階で各種臨床徴候について丁寧な背景説明を繰り返す。また臨床実習開始直前の座学での事前実習では、模擬症例を用いたグループディスカッション、全体へのプレゼンテーションの場を設け、情報共有の有用性を理解させる。また与えられた模擬症例と関連する症例報告に触れさせ、同一疾患の中に存在する様々なバリエーションを理解しておくことの重要性に気づかせるよう準備する。

臨床実習中は個々の学生にはショートレクチャーで対応し、診療後の症例検討会において各自の対面した症例情報を総括してプレゼンテーションさせ、ディスカッションする機会を設ける。

アクティブラーニングについての取組

模擬症例を用いた診断、治療方針決定に関するグループワーク、プレゼンテーション
症例検討会におけるプレゼンテーション、ディスカッション

ICTの教育への活用

電子カルテシステムに蓄積された症例情報（臨床徴候の動画、検査結果データ、顕微鏡写真・X線検査・超音波検査など画像）の学生への提示

教員、研修医がウェアラブル端末装着下で行った臨床手技記録による学生の事前実習蓄積された検査記録の統計分析による新規治療への理論的根拠提供

<p>4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）</p> <p>① <u>教育（授業、実習）の創意工夫（B）</u> 授業：疾患の存在を意識するきっかけとなる“臨床徴候”の理解を深めることに重点をおき、テキストに記載されていない徴候の背景を伝えられるように準備している 実習：アクティブラーニング、ICTを活用し、学生のアウトプット機会増加につとめている</p> <p>② <u>学生の理解度の把握（B）</u> 授業：レポート、定期試験による評価を行っている 実習：グループワーク成果のプレゼンテーション、各自が対面した症例のプレゼンテーション・ディスカッションを行っている</p> <p>③ <u>学生の自学自習を促すための工夫（C）</u> 授業時間で補完できない内容について補助資料を配布している 模擬症例を用いたグループワークでは関連する症例報告を紹介している</p> <p>④ <u>学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A）</u> 主にメールで対応している 実習中はショートレクチャーにより付加情報を与え、自学自習を促すようにしている</p> <p>⑤ <u>双方向授業への工夫（B）</u> 授業：過去に学生から講義後に質問された事項をまとめて、講義内で解説している 実習：双方向で対話する機会が十分に確保されている</p> <p>※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）</p> <p>⑥ <u>国家試験対策としてどのような取組をしましたか。</u> 過去10年間の出題傾向を分析した 頻出分野について、通常の講義で割愛した詳細情報（実際の臨床例のデータ、画像など）を説明した</p>
<p>5. 学生授業評価</p> <p>① <u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u> 扱う情報を減らし、講義をゆっくり進行させるように変更した</p> <p>② <u>①の結果はどうでしたか。</u> 授業評価において改善を求める少数の評価は消失した 講義の遅い進行にたいする悪い評価は無かった</p> <p>③ <u>②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。</u> 前年度の方針を継続する</p>
<p>6. 学生の学修成果</p> <p>① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u></p>

必ず習得しなければならないことを明示する

② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価
特になし

<p>7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況)</p> <p>FD 講演会 : ゲット・ティーチング 賞受賞者から学ぶ“授業の工夫”</p> <p>FD 研修 : 教育改善のための教員活動状況報告書を活用した「ティーチング・ポートフォリオ」の作成に向けて</p> <p>FD 活動「実習に學理を活用した教育改善の例について」</p> <p>FD 講演会「麻布大学の遠隔式授業に対する取組み」</p>
<p>8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)</p> <p>内科診療を担当する複数の教員間で教育理念について再評価を行う (2021 年 3 月)</p> <p>学生の臨床実習を担当する学外機関と教育理念、方法について再評価を行う (2021 年 8~9 月)</p>
<p>9. 添付資料 (根拠資料) (※) 資料名のみ</p> <p>小動物獣医総合臨床Ⅲ</p> <p>リンパ系腫瘍、化学療法、内分泌代謝性疾患 講義資料</p> <p>小動物臨床実習</p> <p>臨床推論演習資料</p>